

「ナンシー・ドーソン」とその関連曲

櫻 井 雅 人

一 「真白き富士の根」の原曲

日本において「ナンシー・ドーソン」(“Nancy Dawson”)という歌(または曲)が話題にされることは、「真白き富士の根」(「七里ガ浜の京歌」)の元歌(“Garden Hymn”)のなかにその原曲として言及されることくらいであろう。この一連の旋律の系譜については手代木俊一⁽¹⁾の調査によれば明らかにされているし、作曲者は長らく伝承されてきた「ガードン」⁽²⁾ではなくてジェレマイア・インガルズであるということも徐々に受け入れられるようになってきた。ごく簡単にまとめると、次のようになる。

三角錫子作詞の「真白き富士の根」(一九一〇)⁽³⁾は、大和田健樹・奥好義編『明治唱歌(第五集)』(一八九〇)に

収録の「夢の外(ほか)」の旋律を借用したもので、「夢の外」はアメリカの歌集『フランクリン・スクウェア・ソング・コレクション(第五集)』(Franklin Square Song Collection, No. 5) (一八八二)に収録されていた“*When We Arrive At Home*”の旋律に新たな日本語歌詞をつけたものである。さらに、この元歌はシェイプ・ノート賛美歌集である『サザン・ハーモニー』(The Southern Harmony) (一八三五)に収録の「ガードン・ヒム」であって、旋律の初出は作曲家インガルズが編纂した一八〇五年の『クリスチャン・ハーモニー』(The Christian Harmony)に所収の「神の愛」“*Love Divine*”である。原型とみられる曲は海を越えてイギリスの“*Nancy Dawson*” (一七六〇)、“*Piss Upon the Grass*” (一七四〇頃)にまで遡ることが

できる。

しかし、これらの元歌や原曲が現在どうなっているのかという点については、「真白き富士の根」にとってはそれほど重要なことではないかもしれないが、少なくとも日本ではほとんど論じられてこなかったようである。「ナンシー・ドーンソン」も「ガーデン・ヒム」も、それから派生した歌や曲(複数)も、姿形を変えつつ歌われたり演奏されていまだに健在であるので、本稿ではその流れを辿ってみることにした。

二 「ナンシー・ドーンソン」

「健在」であると述べたが、もう少し正確に言うと、歌としての「ナンシー・ドーンソン」は歴史的な視点からたまたに関心が寄せられる程度であって、健在なのは曲のほうである、となるろう。

まず手始めに四点の主なる英米の歌謡曲目索引で、“Nancy Dawson”を探してみる。一点に替え歌が挙がっていたが、元歌はいずれにも載っていなかった。プリマス図書館サーヴィスという六万項目収録のオンライン歌謡索引(Plymouth Song Index)によると、かろうじて *The Ox-*

ford Song Book, vol. 2, collected and arranged by Thomas Wood (Oxford University Press, 1927) に収録されているという。以上の索引から判断すると、「ナンシー・ドーンソン」は相当に「入手難」の歌であって、歌詞もほとんど知られていない、といえるだろう。

それでも手元にはこの歌・曲が収録されたCDが二枚あるので、記録の上だけにしか存在しなかった歌といえられた歌といえよう。これは「最初の印刷版」(*Universal Magazine* のことである) に基づく演奏で、歌詞は四番まであり、男声のソロで器楽伴奏が付けられている。器楽曲の「ナンシー・ドーンソン」は *Roast Beef of Old England: Traditional Sailor Songs from Jack Aubrey's Navy*—Jerry Bryant and Starboard Mess (essay 2 CD5001, 2000, track 10) にある。イギリス海軍の戦艦乗組員の回顧録(一八〇五—一八一)に、ファイフ(横笛)で「ナンシー・ドーンソン」などが演奏されてそれを合図にグロッグ(酒)が振舞われた、と書

かれていることから、このCDに含まれているもので、ファイフとフィドルで演奏されている。器楽曲で、旋律も元歌とはいくらかの相違がある。

またインターネット上でもかなりの情報が伝えられている⁽⁷⁾。だいたい簡単に言及するだけであるし、歌詞まで載せたものはほとんどないが、曲名として言及されることは多く、いくつもの楽譜や曲(多くは *hid*) が入手できる。歌としては無名に近くとも曲そのものは今でもかなり知られているようである。

これまで報告された調査結果を見てみよう。この曲・歌が注目されるきっかけはウィリアム・チャペルの研究によるものと思われる。彼は『昔のイングランド民衆音楽』(第二部、一八四〇)⁽⁸⁾に「ナンシー・ドーソン、またはミス・ドーソンのホーンパイプ」と題する歌を楽譜とともに掲載した(歌詞二連)。主旋律のみの楽譜(譜例1)を稿末に示しておく(最終の音符は原著では付点四分音符であるが、四分音符に修正した)。さらに、チャペルは現在でも参考文献として利用されている『昔の民衆音楽』(一八五九)⁽⁹⁾にもこれ(楽譜と二連の歌詞)を掲載したので、系譜が知られるようになった。

チャペルを要約すると、以下のとおりである。題名に使われているナンシー・ドーソンという人物はジョージ二世時代(在位一六八三—一七六〇)の著名なダンサーであって、一七六〇年に伝記が出ていて、肖像画も残っている⁽¹⁰⁾。

ジョン・ゲイ『乞食オペラ』のコヴェント・ガーデンにおける再演(一七五九)に出演して大当たりを取った。一七六七年に死去してブルームズベリに埋葬されている。曲は、彼女の踊りから有名になったもので、カントリー・ダンス「宮廷などの上流階級で流行したダンスであって「田舎踊り」ではない」として多くのコレクションに収録され、「Miss Dawson's Hornpipe」としてハーブシコード用の編曲(一七六〇頃)があり、コミック・オペラ『村の恋』(*Love in a Village*, 1762)の中で小間使いの歌として挿入されている。現在でも「Here we go round the mulberry-bush」(後述)として子供の遊戯で歌われている。またフランスでも「sixième Anglaise de la Reine」なるカントリー・ダンス曲になっている。歌詞は『The Bullfinch』などに掲載されている。なお、「ホーンパイプ」とは現在よりは広い意味であって、ステップ・ダンス曲一般を指していたとのことである。

この歌および関連事項については一八六〇年から六八年にかけて『ノーツ・アンド・クウィアリス (Notes and Queries)』誌上で四回の投稿があった。⁽¹¹⁾ 第一〇巻第二シリーズ(一八六〇年八月一日号、一一〇ページ)においては“Nancy Dawson”なる古い歌 (old song) の歌詞を求むという要請があり、これに対して“Of all the girls in our town”で始まる八連(実際は四連に相当する)の歌詞を含む回答があった。回答者はその中で「ジョージ二世の御代に流行した。一般読者の多くは目にすることない The Bullfinch とか Harrison's Vocal Magazine (1781) のような珍しいコレクション以外ではめったに見かけない。この歌詞は作家で俳優の George Alexander Stevens の作であるとされてきた。」という趣旨を言っている。つまり、すでに十九世紀の中頃のイギリスでは歌詞はほとんど忘れ去られていたということになる。

しかし、題名と曲そのものはかなり知られていたように、十八世紀から十九世紀のブロードサイド・バラッドでも「ナンシー・ドーンソンの曲に合わせ(To the Tune of Nancy Dawson)」と指定された「替え歌」がいくつも作られている。たとえば、オックスフォード大学のコレク

ションである Bodleian Library Broadside Ballads⁽¹²⁾ にブロードサイド・バラッドが一五点収録されていて(ただし、元歌のブロードサイドは含まれていない)、出版年代がわかっているものでは一七七四年から一八五八年までにわたる。替え歌(しかも、現在まで歌い継がれたものはない)だけが盛んに作られたのである。なお、ロイ・パーマー編『スルを鳴らせ』⁽¹³⁾ に所収の運河建設の歌 (“Gran-tham Navigation,” 1793) には、この曲で歌われたという確証はないが、「ナンシー・ドーンソンの」の曲が付けられている。曲の記録もかなりあって、たとえば一七八〇年頃のエアードのスコットランド曲集にも収録されている(イングランド版と大きな違いはない)⁽¹⁴⁾。また、アメリカでも「ナンシー・ドーンソンの」は替え歌になった。“A Song, Wrote in the Spring of the year 1776” (1776, 歌詞は “Ye Tories all rejoice and sing” と始まる) “American Liberty, or, the Sovereign Right of Thinking” (1798) と題する歌が記録されている⁽¹⁵⁾。

ナンシー・ドーンソンの名前はわらへ歌にもなった(ただし、旋律および内容は別の歌である)。初めはハリウェル『イングリランドのわらへ歌集』(J.O. Halliwell, *The Nurs-*

ery Rhymes of England) の第一版 (一八四二) に載ったもので、第五版 (一八五三) で主人公の名前は“Elsie Marley”に取り替えられた。⁽¹⁶⁾ この他にも“Nancy Dawson”という名を題名に含む曲 (フィドル曲など) がいくつもある。⁽¹⁷⁾ 一九一〇年版の『グロウヴ音楽辞典』では“Nancy Dawson”の見出しが立てられて、フランク・キドソンが執筆している。大筋はチャペルと同じであるが、いくつかの新しい情報が加えられている。とくに、ここでならに古い記録が報告された。それによると、「ナンシー・ドーン」はそれ以前からあった曲で、ウォルシュ編『カレドニアン・カントリー・ダンス曲集』(Walsh's Caledonian Country Dances, book III (c. 1744), p.36) およびピューター・トムソン編『フルート完全教本』(Peter Thompson's Complete Tutor for the Flute (c. 1750-54)) に「上品な題名 (coarse title)」の曲 (歌ではなく) として含まれているという。キドソン執筆の項目に楽譜 (譜例 2) は掲載されているが、ヴィクトリア朝時代育ちのキドソンは、曲名 (“Piss Upon the Grass”) に言及することを差し控えている。ウォルシュ版および関連する七曲の楽譜は、フライシュマン編『アイルランド伝承音楽資料集』に収録されて

いる (ただし、旋律のみで歌詞は付いていない、また、必ずしもアイルランド版のみではない)。インターネットに載っている他の楽譜 (どちらも A B C 記譜)⁽²⁰⁾ も原著から転写したもののようである。メアリー・リチャーズ (Mary Richards, 1787-1877) のウォールズ曲集でも “Piss ar y Gwair” (“Piss on the Grass”) として収録されていると⁽²¹⁾ いう。以上のウォルシュ版 (ただし、原著の楽譜は筆者未見) はすべてキドソンの引用版と同じである。手代木が引用する楽譜 (比較的最近の手書きと思われる)⁽²²⁾ とは一部 (四小節目と二三小節目) に相違がある (おそらく誤りであらう)。

ブロードサイド・バラッドの音楽に関する基本文献であるクロード・シンプソン『イギリス・ブロードサイド・バラッドとその音楽』⁽²³⁾ では、“Nancy Dawson”についてあらゆる情報を付け加えている (楽譜および四連の歌詞あり)。シンプソンによると、ジョージ・アレクサンダー・ステューウэнズ (George Alexander Stevens) 作詞と伝えられる “Nancy Dawson” は二枚刷り (single sheet) で発行されて、『ユニヴァーサル・マガジン』誌 (Universal Magazine, XXVII, Oct., 1760, p.208) に再録

された⁽²⁴⁾。ただし、不思議なことに、シン普森が見落としたのであろうか、“Piss Upon the Grass”にはまったく言及していない。なお、ジェイムズ・J・ファルドも『カレドニアン・カントリー・ダンス曲集』(二七四〇年頃、という)を参照していて、曲は二箇所に掲載され、一方は見開きページである、という⁽²⁵⁾。

三 遊び歌 (The Mulberry Bush)

後継の曲として最も有名なものは“(Here We Go Round) ‘The Mulberry Bush’ でもあり、日本でも「桑のまわりをまわるうた」などと⁽²⁷⁾知られている⁽²⁶⁾。ニューウェルが報告しているアメリカ版を譜例3で示す(ただし、現行の一般的な版と違いがある)。ジェイムズ・ファルドによると、歌詞の初出はロバート・チェインバース編『スコットランドわらべ歌・物語集』(*Popular Rhymes, Fireside Stories, and Amusements of Scotland* [by Robert Chambers], Edinburgh, 1842) の “Here We Go Round The Mulberry Bush” として載った(ただし、一八二六年版には含まれていない)⁽²⁸⁾、とのことである。同じくロバート・チェインバース編の『スコットランドのわら

べ歌』に “The Merry-Ma-Tanzie” と題して一〇編ほどのヴァリアントが収録されている (“This is the way...” も一編ある)。「最初に女の子たちは手をつないで輪になり、回りながら、ナンシー・ドーンソンの曲に合わせて歌う」という。

ファルドによると、曲も付いた版はアメリカのエイサ・フィッツ編『エクササイズ歌集』(Asa Fitz, *The Exercise Song Book*, Boston, 1858) が初めてで、現在でも歌われ “This is the way... So early in the morning” とする歌詞の “Morning Song” と題されている (つまりには mulberry bush とはうた歌詞はない)。先述のチャペル (一八五九年) は子供の遊戯歌として引き合いに出しているし、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』(一八七一年、第四章)でも、題名のみ引用ではあるが、アリスはトウイードゥルダムとトウイードゥルディーと一緒に歌ったと語っているので、そのころにはかなり広まっていたと考えられる。記録としては少し後に “Here we go gathering nuts in May” などの異なる遊びに付随する歌にもなっている。いずれも英米の両方で傳承されていて、歌詞のヴァリエーションも多い⁽³⁰⁾。ついでながら、T・S・エリ

オットとは“*This is the way the world ends / Not with a bang but a whimper.*” (“*The Hollow Men,*” 1927)と同じもの引用がある。⁽¹⁶⁾

四 クリスマス・キャロル (*I Saw Three Ships*)

十九世紀以来のクリスマス・キャロルの定番となっている“*I Saw Three Ships*” (および関連曲の“*As I Sat On a Sunny Bank*”)も派生曲であるとされている。⁽³²⁾ すなわち一八三三年出版のサンデイズ編『古今クリスマス・キャロル集』⁽³³⁾に歌詞(九連)と曲とが収録されていて、ブラムリーとステイナーのキャロル集(一八七八年版)、⁽³⁴⁾『オックスフォード版キャロル集』(一九二八)⁽³⁵⁾をはじめとして二十世紀の主なキャロル・コレクションに載っているし、CDも多い。しかし、初めから「ナンシー・ドーン」とは違っていた。繋がりも一目瞭然ではない。サンデイズ版(譜例4)は「ナンシー・ドーン」の替え歌が盛んに歌われていた時代に記録されたものであり、3/4拍子で記譜されているが、現在多くの歌集で示されているように本来は4/4拍子ないしは6/8拍子であろう。ブラムリー||ステイナー版は現在よく知られている旋律である。

歌詞(曲ではない)の点から見ると、ジョン・フォースの『カントゥス』(John Forbes, *Cantus*, 2nd ed., 1666)まで遡ることができる。⁽³⁶⁾ また、十九世紀から二十世紀にかけてフィールドワークからも収集されている。ブロードウッドとメイトランド編『イングリランドのカウンティ・ソング集』⁽³⁷⁾の“*As I Sat on a Sunny Bank*”にはかなりの違いがあるが、参考のために挙げておく(譜例5)。

五 「ガーデン・ヒム」

この賛美歌については、手代木前掲書で主要な楽譜とともに論述がなされているので、ここで繰り返す必要はないように思えるが、いくつかの点について補足をおきたい。

一八二〇年以前の賛美歌曲目の索引であるニコラス・テンバリー編『賛美歌曲名索引』⁽³⁸⁾によると、LOVE DIVINEという曲名の付いた賛美歌は全部で一〇曲あり、そのうち“*To him who did salvation bring, wake, ev'ry tuneful pow'r, and sing*”の歌詞で始まるものの“*Love Divine*” (#11032)が収録されている賛美歌集はインガルズの『ク

リスチャン・ハーモニー⁽³⁹⁾』のみである。また、『サザン・ハーモニー』版では出典が示されていないが、『ケンタッキー・ハーモニー』(一八二六)、ただし、筆者未見)から転載されたと考えられ、現行の一九九一年版『セイクレッド・ハーブ』(後述)は後者を出典としている。これらは同じ歌詞・編曲である。

問題は、インガルズの原曲(および『サザン・ハーモニー』版)と『フランクリン・スクウェア・ソング・コレクション』(および「真白き富士の根」の間にはかなりの異同があることである。旋律・歌詞・編曲などを比べてみれば明らかのように、『フランクリン・スクウェア』版の“When We Arrive at Home”は直接インガルズ版(ないしは『サザン・ハーモニー』版)から採られたものではない。インガルズ版とは歌詞・旋律・編曲が違出し、『サザン・ハーモニー』版の“Garden Hymn”とは旋律・編曲が違ふ。さらに、『サザン・ハーモニー』版には歌詞が一連しか付いておらず、かんじんの“When we arrive at home”を含む連がない。編曲は決め手にならないと言えるかもしれないが、シェイプ・ノートでは主旋律がテナーに置かれるという詩編歌以来の伝統があって、ソプラノが

主旋律ではないし、さらに音階からみてもシェイプ・ノート版の五音音階と『フランクリン・スクウェア』版の“When We Arrive at Home”とは和声の響きがかなり異なる。『フランクリン・スクウェア』が新たに編曲を施して、歌詞を他から追加した、とも解釈できるかもしれないが、『フランクリン・スクウェア』はそれほどオリジナルな歌集ではないので、どこか他の出典から転載されたものであろう。題名の“When We Arrive at Home”は第三連末尾の歌詞から採用されたもので、一般の賛美歌の題名の付け方とは違う(『フランクリン・スクウェア』には賛美歌も含まれているが賛美歌集ではなく、この題名は独自に採用したものかもしれない)。

他のヴァージョンも参照して見よう。一八四四年に発行された末日聖徒イエス・キリスト教会(モルモン教)の小さな『聖歌集』⁽⁴¹⁾に掲載の“Salen's Bright King”(二声部)は、一部に相違はあるもののインガルズの“Love Divine”(二声部)と主旋律はほぼ同じであって、旋律はインガルズ版から採られたものと推測される(類似点としては、冒頭は「ソー・ラ・ドー・ド」ではなく「ソー・ドー・ド」であるし、3段目にシャープ音が使われてい

る)。これは日本では知られていないヴァージョンのようであるので紹介しておく(譜例6)。なお、メノー派のシェイプ・ノート賛美歌集『ハルモニア・スクラ』に収録の版は、曲名・歌詞 (TRANSPORT: "One spark, O God, of heavenly fire") と多少違⁽⁴²⁾いが GARDEN HYMN であり、『サザン・ハーモニー』版に近い。

一八五三年出版のシェイプ・ノート賛美歌集『セイクルンツ・メロディオーン』に四声部の LOVE DIVINE ("Praise shall the generous man attend")⁽⁴³⁾がある。曲名はインガルズ版と同じで主旋律は似ているが、歌詞・編曲が違う。一方、歌詞と曲名 (GOODWIN) は違⁽⁴⁴⁾うが一八六七年出版の『フィルモアのシオンのハーブ』にある "To Him who did salvation bring" (譜例8、これはインガルズ版の歌詞でもある) は『フランクリン・スクウェア』版と旋律がよく似ている(ただし、数字譜で、最高音などに相違がある)。さらに『フランクリン・スクウェア』版と似ているのはジョーゼフ・ヒルマン編『ザ・リヴァイヴァリスト』(一八六八、増補改訂版一八七二)⁽⁴⁵⁾に所収の「ガーデン・ヒム」である。三連からなる歌詞が付いているが、"When we arrive at home" の歌詞を含む連はない。

旋律の点からみると、一八六〇年代には『フランクリン・スクウェア』版(の原型)は成立していた、と言える。なお、年代は後になるが、一九〇二年出版の『プリミティヴ・バプティスト賛美歌集』⁽⁴⁶⁾に採用されている "Awake by Sinai's awful sound" (S. Occom の作詞、題は Garden) も旋律は『フランクリン・スクウェア』版に近いところがある。興味深いことに、アウフタクトの扱いや二つの十六分音符を八分音符にまとめるところなどは山本正夫編曲の「真白き富士の根」(一九一六)⁽⁴⁷⁾に似ている。参照できた資料の中でもっとも可能性が高いのは一八六六年出版のゴースラム編『ジュビリー・ハーブ』⁽⁴⁸⁾に掲載の "The Lord into His Garden Comes" であろう(譜例7)。この旋律・編曲は、インガルズ版・『サザン・ハーモニー』版とではなくて、『フランクリン・スクウェア』版とだいたい同じである(ただし、歌詞は六連ある)。「フランクリン・スクウェア」版は直接インガルズ版・『サザン・ハーモニー』版から来ているのではなくて、「以上の資料に限って言えば」という但し書きを付けなくてはならないが、出典の第一候補は『ジュビリー・ハーブ』版であって、歌詞を三連に短縮し編曲に若干の手を加えたものと推定する

のが妥当であろう。また、『ジュビリー・ハーブ』版は一八六〇年代の版を一般の賛美歌風に作り変えたものと考えられるが、とくに冒頭の旋律をみると、『サザン・ハーモニー』版を経由していない可能性がある(また、歌詞二一六連の出典も『サザン・ハーモニー』ではない)。

なお、『Press on, press on, ye chosen band』で始まる歌詞で、「ナンシー・トーンン」の曲による賛美歌が、「ガーデン・ヒム」よりも前から(十八世紀の終わり頃から十九世紀の中頃まで)シェイカーの間で歌われた⁽⁴⁹⁾。楽譜が記録されていないので「ガーデン・ヒム」との関係は不明である。また、BEREA (歌詞は Charles Wesley の“Come, sinners, to the Gospel feast”)と⁽⁵⁰⁾短く曲も「ナンシー・トーンン」の冒頭に似ている(これも関係は不明)。

「ガーデン・ヒム」の現在にも触れておく。当初の『セイクレット・ハーブ』には“The Lord Into His Garden Comes”の歌詞では NASHVILLE の曲が付けられていたが、現行版の一つ(一九九一年の「レット・ブック」)⁽⁵¹⁾には GARDEN HYMN (歌詞「連’ “When we arrive at home” の歌詞を含む)として収録されているので、現在

でも歌われており、インターネットでも歌唱を聞くことができる。⁽⁵²⁾ 冒頭の旋律は「ソー・ラ・ドー・ド・ド・レ・シ」で、『サザン・ハーモニー』版と同じ編曲であり、出典は“Supplement to the Kentucky Harmony, 1826”と書かれている。また、最近のシェイブ・ノート歌集である『ノーザン・ハーモニー』⁽⁵³⁾にも新たな編曲版が含まれている(歌詞五連’ “When we arrive at home” の連を含む) 冒頭の旋律は「ソー・ドー・ド・ド・レ・シ」で全体として『プリミティブ・バプティスト賛美歌集』版に似ている)。これらを出典として、「ガーデン・ヒム」はシェイブ・ノート歌唱以外にも広まり、いくつかの編曲楽譜も出版され、さまざまなCDの録音もあり、あちこちで歌い継がれている。題名は“Garden Hymn”あるいは“The Lord Into His Garden Comes”の他⁽⁵⁴⁾、しばしば“Song of the Garden”(いづころから使われているのか不明であるが、インターネット上ではこれが一般的)と呼ばれていて、外国語(中国語・タイ語・オランダ語)の訳詞もある。

六 日本の賛美歌

日本では、日本福音連盟の『聖歌』六二三番(および

(31) 「ナンシー・ドーソン」とその関連曲

『新聖歌』四六五番)の「いつかは知らねど」という賛美歌になっている。曲名はMASIROKI HUZINO-NE(『新聖歌』ではMASHIROKI FUJI-NO-NE)であり、日本版の「真白き富士の根」の旋律に新たな歌詞を付けたものである。聖イエスの『聖歌』に収録の「救いのくさは世界に拡がり」(作詞者・作曲者 Unknown、曲名なし)の旋律は「夢の外」ときわめて近いが同一ではない(これも日本版から由来すると思われる)。なお、世界基督教統一神霊協会(統一教会)の『聖歌』(一九七六)の「成約聖歌第一部」に第三九番「園の歌」(しゅはおのがそ⁽⁵³⁾のにきたる そのかおりみちて)が収録されている。これはアメリカ版の *Holy Songs* (No.27) 所収の“Song of the Garden”⁽⁵⁶⁾の訳詞であり、旋律もシェイプ・ノート版に基づくものであって「真白き富士の根」版ではなご。

(1) 手代木俊一『讚美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、一九九九、九三―九八ページ)、楽譜は巻末の譜例一八―二五)、また安田寛『日韓唱歌の源流』(音楽之友社、一九九九、六六―七二ページ)参照。

(2) 「ガーデン」とは人名ではなくて曲名(GARDEN)であった。堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』(岩波文庫、

一九五八、一四〇―四一ページ)は「ガーデン作曲」説の普及に「貢献」した。

(3) 『明治唱歌(第五集)』は、次の高知市民図書館近森文庫で参照できる。なお、以下、それぞれのインターネット・サイトのURLは二〇〇四年五月現在のものである。
<http://school.nijiac.jp/Kindai/CKMR.html>

(4) 十六万項目を収録したEllen Luchinsky, *The Song Index of the Enoch Pratt Free Library*, 2 vols. (Garland, 1998)と、約三万二千項目を収録したGary Lynn Ferguson, *Song Finder: A Title Index to 32,000 Popular Songs in Collections, 1854-1992* (Greenwood, 1995)と一万項目のRoger Lax and Frederick Smith, *The Great Song Index* (Oxford University Press, 1984)とを見逃すなご。約五万項目のFlorence E. Brunnings, *Folk Song Index: A Comprehensive Guide to the Florence E. Brunnings Collection* (Garland, 1981)に数頁(巻末)の(5) *Plymouth Library Services Online* (<http://www.webopac.plymouth.gov.uk/cgi-bin/plymouth-cat.sh>)
(6) この項に關してはRoy Palmer, *The Valiant Sailor: Sea Songs and Ballads and Prose Passages Illustrating Life on the Lower Deck in Nelson's Navy* (Cambridge

- University Press, 1973, p.26: 曲(の)を参照。"Cheerily Man"より「ナンシー・エーモン」の曲名を採った。より正確な曲名は「Joanna Colcord のナンシー集 (Songs of American Sailormen, 1938, rpt. Oak, 1964, p.73) の版を参照した」。
- (7) Googleより"nancy dawson"を検索(1100四年五月一日閲覧)から「H〇生」の曲名を採った。
- (8) William Chappell, *Old English Popular Music* ([1838, 1840] : 2 parts in one, [1893] ; rpt. Jack Brusel, [1961], pt. 2, pp.186-87).
- (9) William Chappell, *Popular Music of the Olden Time* (The Whole of the Airs Harmonized by G.A. Macfarren), vol. 2 (London: Cramer, Beale, & Chappell, [1859], pp. 718-20). ユートン社蔵本の1巻にも歌集の著者 J. Oxenford, ed., *Old English Ditties, selected from W. Chappell's Popular Music of the Olden Time*, 2 vols. (Chappell & Co., n.d. [1884]) の名前が記されている。(10) 画像の「かたじけなく」。
- PeoplePlay UK—Dance in 18th Century Theatre
http://www.peopleplayuk.org/guided_tours/dance_tour/popular_theatre/theatre.php
- (11) オックスフォード大学の Internet Library of Early Journals を参照した。 <http://www.bodley.ox.ac.uk/jlei/>
- (12) <http://www.bodley.ox.ac.uk/ballads/ballads.htm>
- (13) Roy Palmer, ed., *Strike the Bell* (Cambridge University Press, 1978, pp.20-21).
- (14) 註(9)を参照された。
- (15) Vera Brodsky Lawrence, *Music for Patriots, Politicians, and Presidents* (New York: Macmillan, 1975, pp. 75 and 150).
- (16) Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 2nd ed. (Oxford University Press, 1997, p. 190); J.O. Halliwell, *The Nursery Rhymes of England* ([1853] ; Bodley Head, 1970, p.74).
- (17) ナンシー "Faithless Nancy Dawson" について。
- (18) *Grove's Dictionary of Music and Musicians*, ed. J.A. Fuller Maitland (London: Macmillan & Co. Ltd, 1910). 元のインターネット版を参照した(原著のページ番号不明)。 <http://www.mustrad.org.uk/articles/kidson.htm>
- (19) Aloys Fleischmann, ed., *Sources of Irish Traditional Music c.1600-1855*, 2 vols. (New York: Garland, 1998) :

- #757 : "Piss Upon the Grass" (*Caledonian Country Dances*, 1737-40, III 236)
- #1627 : "A Medley" (*Love in a Village: A Comic Opera*, 1763, I 15)
- #1638 : [Nancy Dawson] (Kane O'Hara, *Midas: A Comic Opera*, 1764, III 50)
- #1771 : "Nancy Dawson Hornpipe" (*A Collection of Violin Music* by James Gillespie, 1768, III 111e)
- #2486 : "Nancy Dawson" (J. Aird, ed., *A Selection of Scotch, English, Irish and Foreign Airs*, 1790-97, I 112)
- #3844 : "Nancy Dawson" (B. Cooke, *Forty Eight Irish Country Dances*, c1805, I 17)
- #6436 : "Nancy Dawson" (J.P. Lynch, ed., *The Melodies of Ireland*, 1845-46, 34)
- (28) a. Ceolias : The Fiddler's Companion
<http://www.ceolias.org/cgi-bin/ht2/ht2-1c/case=yes>
- b. Broadside Ballad Tunes : Tunes for 16 and 17th Century Broadside Ballads
<http://users.erols.com/olsonw/BLDTNNDX.HTM>
- (29) 次の中の X : 49 を参照。曲 (イロウ記譜) は同一である。
- http://lochaber.tullochgorm.com/~jc/music/abc/mirror/BrianMartin/msg/welsh_tunes_2ABC
- (30) 手代木俊一『讚美歌・聖歌と日本の近代』三九八ページ。
- (31) Claude Simpson, *The British Broadside Ballad and Its Music* (Rutgers University Press, 1966, pp.503-505)
- (32) この楽譜の写真版は手代木前掲書三九七ページである。
- (33) James J. Fuld, *The Book of World-Famous Music: Classical, Popular and Folk*, 5th ed. (New York : Dover, 2000, s.v. Mulberry Bush [p.378])
- (34) ベッキー・ブーンズの歌について扱われている。平野敬一編『続ベッキー・ブーンズ童謡集』(イロウ出版局)一九九七年「三三三」("The Mulberry Bush") である。
- (35) William Wells Newell, *Games and Songs of American Children* (1884; rpt. Baltimore, Md. : Clearfield, 1992, p. 86; "As We Go Round the Mulberry Bush"; この伴奏楽譜の歌詞は入魂)。「Here We Come Gathering Nuts of May」の収録がされているが、楽譜は作られていない (p.89)。
- (36) オーブーフ妻のいると、一八二一年の *Blackwood's Edinburgh Magazine* (x, 1821, p.37) に「バルベリー・ブッシュがナンシー・ドーンソンの曲に合わせて歌われた」

- イニエツとオピアの『The Singing Game』(Iona and Peter Opie, *The Singing Game*, Oxford University Press, 1985, pp.279 and 291)°
- (82) Robert Chambers, *Popular Rhymes of Scotland*, New Edition (Edinburgh: Chambers, n.d., pp.131-35; 語訳のみ).
- (83) この類を説くところを Opie, *The Singing Game* を指して (pp.150-54, 276-80, 286-92, 292-294)° 以下を総称とせよ。Alice Bertha Gomme, *The Traditional Games of England, Scotland, and Ireland*, vol. 1 (1894; rpt. New York: Dover, 1964, pp.404-07, 424-33); Patrick Shuldham-Shaw, Emily B. Lyle and Katherine Campbell, eds., *The Greig-Duncan Folk Song Collection*, vol.8 (Edinburgh: Mercat Press, 2002, pp.131-33, 156-57).
- (84) この他の引用例が、豊山海十『ふりや知りたるマキヤーズ』(スクリーンブレイク、二〇〇一、四六一-四九二ページ)に引くか類々をたす。
- (85) Simpson, *The British Broadside Ballad and Its Music*, p. 505.
- (86) William Sandys, *Christmas Carols. Ancient and Modern* (1833; rpt. n.p., Folcroft, 1976, pp.112; 歌題を類本).
- (87) Rev. Henry Ramsden Bramley and John Stainer, eds., *Christmas Carols New and Old* (London: Novello, Ewer & Co., [1871]) の序文を引く。一八七一年版 (p.164-165) に収録された。
- a. *Christmas Carols New and Old* (1871 ed.) [和訳 - 訳]
- <http://www.ocel.org/b/bramley/carols/home.html>
- b. *Christmas Carols New and Old* (1878 ed.) [和訳 - 訳]
- http://www.hymnsandcarolschristmas.com/hymns_and_carols/i_saw_three_ships.htm
- (88) Percy Dearmer, R. Vaughan Williams and Martin Shaw, *The Oxford Book of Carols* (Oxford University Press, 1928, Nos. 3 and 18). Erik Routley, *The English Carol* (1959; rpt. Greenwood, 1973) 44-45 Douglas Brice, *The Folk Carol of England* (London: Herbert Jenkins, 1967) の類々をたす。Hugh Keyte and Andrew Parrott, eds., *The New Oxford Book of Carols* (Oxford University Press, 1992, pp.516-18) を総称とせよ。
- (89) Iona & Peter Opie, eds., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 2nd ed. (no. 471 [p.456]) に「博覧多田」をたす。Sandys, *Christmas Carols* を類本の類 (p.

- (184) F. Ritson による曲集の序言に「The Southern Harmony and Musical Companion」の存在が記されている。
- (185) Lucy Broadwood and J.A. Fuller Maitland, eds., *English County Songs* (London: Leadenhall Press, 1893, p.111; 楽譜入り、ユークン並装丁)。
- (186) Nicholas Temperley, *The Hymn Tune Index: A Census of English-Language Hymn Tunes in Printed Sources from 1535 to 1820* (Oxford: Clarendon Press, 1998). 楽譜集に「Jeremiah Ingalls, *The Christian Harmony* (Exeter, New Hampshire: Henry Ranlet, for the compiler, 1805, 199pp.)」の「Pre- face dated Newbury, Vt., Nov. 1804. Adv. as just published, Boston *Democrat*, 9 March 1805.”」の存在が記されている。
- (187) *The Christian Harmony* による曲集の序言に「The Christian Harmony」の存在が記されている。また「The Christian Harmony」の存在が記されている。
- (188) Jeremiah Ingalls, singing master, composer, and choir leader; b. Andover, Mass., March 1, 1764; d. Hancock, Vt., April, 6, 1828.” (Charles W. Hughes, *American Hymns Old and New: Notes on the Hymns and Biographies of the Authors and Composers*, New York: Columbia University Press, 1980, p.445)。
- (189) *The Southern Harmony and Musical Companion* ([1835], 1854; rpt. University Press of Kentucky, 1987, p.90). 楽譜入り並装丁。Richard Chase, *American Folk Tales and Songs* ([1956]; rpt. Dover Publications, 1971, pp.158-59; “The Garden Hymn”) に転載されている。
- (190) *A Collection of Sacred Hymns, For the Use of The Latter Day Saints*, selected and published by J.C. Little and G.B. Gardner (Bellow Falls: Printed by Blake and Bailey, 1844; rpt. Mason County History Project, [1990, 1996], no. 26 [pp.50-51]). 楽譜入り。Hymns of *The Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints* (1985) に転載されている。
- (191) *The Harmonia Sacra*, 25th ed. (Intercourse, PA: Good Books, 1993, p.1172).
- (192) Enos E. Dowling Hymnal Collection に収録されている。A.S. Hayden, *The Sacred Melodeon* (A.S. Hayden, [1853], p.131; LOVE DIVINE) <http://www.lccs.edu/library/hymnals/hymn-display.php?3?id=SM48&hymn=5537>
- (193) Enos E. Dowling Hymnal Collection に収録されている。

- A.D. Fillmore, *Fillmore's Harp of Zion* (R W Carroll & Co., [1867], p.180; GOODWIN)
<http://www.lccs.edu/library/hymnals/hymn-dis-play.php3?id=FH167&hymn=4934>
- (45) Joseph Hillman, comp., *The Revivalist* (Troy, NY: 1868; revised and enlarged ed., 1872, p.166). 邦訳版は 参照せよ。 George Pullen Jackson, *Down-East Spirituals And Others* (1943; rpt. Da Capo, 1975, pp.166-67). 邦訳版は 参照せよ。 邦訳版は 参照せよ。
- (46) John R. Daily and E. W. Thomas, *Primitive Baptist Hymn and Tune Book* (Luray, Va. and Danville, Ind.: Published by the Authors, 1902, p.117).
- (47) 手代木前掲書『三九四〜』。
- (48) A.T. Gorham, *Jubilee Harp* (1866). Christ-Janer, Hughes and Smith, *American Hymns Old and New* (New York: Columbia University Press, 1980, p. 367; 題名“The Lord into His Garden Comes”; 邦訳 Notes, p. 142) を参照せよ。
- (49) Edward Deming Andrews, *The Gift To Be Simple : Songs, Dances and Rituals of the American Shakers* (1940; rpt. Dover, 1962, p.83; 参照せよ)。
- (50) *Fillmore's Harp of Zion* ([1867], p.307) 邦訳版 A.D. Fillmore and Robert Skene, *Fillmore's Christian Psalter* (R.W. Carroll & Co, 1867, p.373) 邦訳版 (参照せよ)。
- Eros E. Dowling Hymnal Collection 邦訳版 (参照せよ)。
- (51) *The Sacred Harp (1991 Revision)* ([Cullman, Alabama]: Sacred Harp Publishing Company, 1991, p. 284). 邦訳版 *Original Sacred Harp* (Denson Revision, 1971 Edition) 邦訳版 NASHVILLE 邦訳版 *The B.F. White Sacred Harp* (Revised Cooper Edition, 2000) 邦訳版 FRESHING SHOWERS 邦訳版。
- (52) Voices of Maquoketa River
<http://www.pilgrimproduction.net/sacredharp/maquoketa/maquoketa.html>
- (53) Larry Gordon et al., eds., *Northern Harmony*, revised third edition (Plainfield, Vermont: Northern Harmony Publishing Company, 1995, pp.78-79; “Trad. Arr. :D.M. Mansfield/T. Eriksen”), 邦訳版 Tim Eriksen 邦訳版 トムソン (Tim Eriksen, Appleseed ASIN: B00005 BGKC, 2001) 邦訳版の曲をソングブックの邦訳版に収録せよ。
- (54) 聖トマス公会讃歌編集委員会編『聖トマス公会讃歌』(聖トマス公会社 一九六三) 改訂初版 一九七二(五回版)。
- (55) 改訂讃歌集一冊 (Hymn 1)

(37) 「ナンシー・ドーソン」とその関連曲

<http://hymnsongsf.xrea.com/the-one.html>

(6) "HOLY SONGS": SONGS OF THE UNIFICATION CHURCH (<http://www.euro-tongil.org/hs/hsongs.htm>)

【追記】(4) 次のサイト (Southern Harmony) で楽譜を参照せよ。 http://www.ccel.org/s/Southern_Harmony/sharm/sharm/contents.html

(4) *The Jubilee Harp* の原著を参照することができず。標題紙は *The Jubilee Harp: A Choice Selection of Psalms, Ancient and Modern, Designed for Use in Public and Social Worship* (Boston: Advent Christian Publication Society, [1866], 1867) である (A.T. Gorham の名前が標題紙にはなくて、Preface の文中に書かれている)。No. 626 の GARDEN HYMN ("The Lord into his garden comes") が収録されている。六連の歌詞が付いている。主旋律は *American Hymns Old and New* の一回であるが (ただし、フェルマータの付け方にも違いがある)、ト長調であって、ソプラノの旋律は主旋律よりも高い音である点など、編曲に違いがある (*American Hymns Old and New* の版では "the music slightly modified" となっている)。

(一橋大学大学院経済学研究科教授)

Ex.1: Nancy Dawson, or Miss Dawson's Hornpipe

Of all the girls in our town, The black, the fair, the red, the brown, That dance and prance it up and down, There's none like Nancy Dawson. Her easy mien, her shape so neat, She looks so sweet, Her every motion's so complete, I die for Nancy Dawson.

Ex. 2: *Piss Upon the Grass* (Walsh and Thompson)

Musical notation for Ex. 2: *Piss Upon the Grass* (Walsh and Thompson). The piece is in 6/8 time and consists of three staves of music. The melody is written in a single voice part, featuring a mix of eighth and sixteenth notes.

Ex. 3: *As We Go Round the Mulberry Bush* (Newell 1884)

Musical notation for Ex. 3: *As We Go Round the Mulberry Bush* (Newell 1884). The piece is in 6/8 time and consists of three staves of music. The lyrics are written below the notes.

As we go round the mul-ber-ry bush, the mul-ber-ry bush, the
mul-ber-ry bush; As we go round the mul-ber-ry bush, So
ear-ly in the morn-ing.

Ex. 4: *I Saw Three Ships* (Sandys 1833)

Musical notation for Ex. 4: *I Saw Three Ships* (Sandys 1833). The piece is in 3/4 time and consists of three staves of music. The lyrics are written below the notes.

I saw three ships come sail-ing in On Christ-mas day, on
Christ-mas day I saw three ships come sail-ing in On
Christ-mas day in the morn-ing.

(39) 「ナンシー・ドーソン」とその関連曲

Ex. 5: As I Sat on a Sunny Bank (Broadwood and Maitland 1893)

As I sat on a sun - ny bank, a sun - ny bank, a sun - ny bank, As
I sat on a sun - ny bank, On Christ - mas Day in the morn - ing.

Ex. 6: Salem's Bright King (1844)

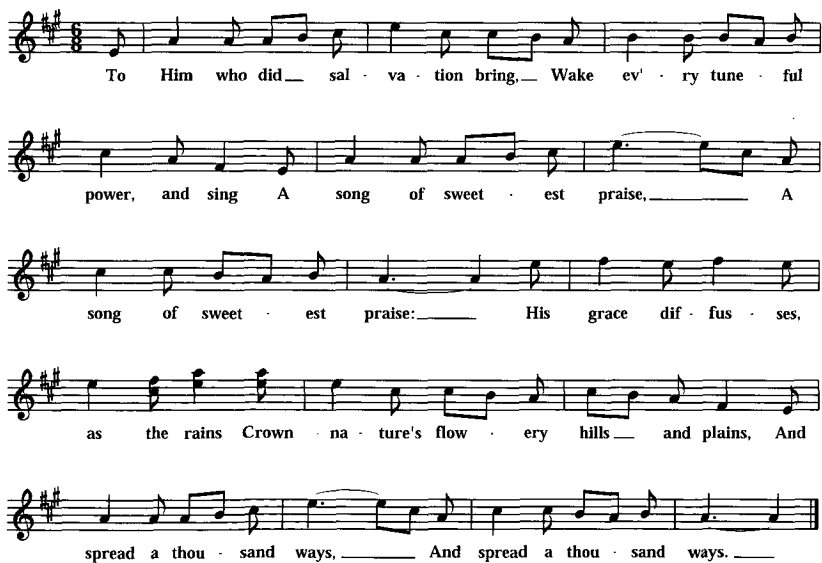
Sa - lem's bright King, Je - sus by name In an - cient times to
Jor - dan came All righ - teous - ness to fill All righ - teous - ness to fill: 'Twas
there an an - ceint pro - phet stood, Whose name was John, a man of
God, To do his mas - ter's will, To do his mas - ter's will.

Ex. 7: The Lord into His Garden Comes (Jubilee Harp 1866)



The Lord in-to his gar-den comes; The spic-es yield a rich per-fume, The
lil-ies grow and thrive; The lil-ies grow and thrive.
Re-fresh-ing showers of grace di-vine, From Je-sus flow to
ev-e-ry vine, Which makes the dead re-vive Which
makes the dead re-vive.

Ex. 8: GOODWIN (Fillmore's Harp of Zion 1867)



To Him who did sal-va-tion bring, Wake ev'-ry tune-ful
power, and sing A song of sweet-est praise, A
song of sweet-est praise: His grace dif-fus-es,
as the rains Crown-na-ture's flow-ery hills and plains, And
spread a thou-sand ways, And spread a thou-sand ways.